

三ツ木遺跡調査概報

八幡一郎・林茂樹

一 調査概況

1. 地形及び位置

本遺跡は、天竜川の左岸に形成された洪積世段丘上にあつて、東側伊那山地の西麓からのびる舌状台地がいくつか形成されているが、その中の三ツ木丘陵（仮称）の先端部に位置している。この丘陵は西南、南側と北側を大沢川の支流により開折され、東西に長軸をもつた丘陵で、厚さ6m～7mの信州ローム層におおわれ、表面は300m内外の黒土層が形成され、黒土層とローム層の間に黄褐色の亜ローム層（栗色土層）が10cm～20cm存在する。

この舌状丘陵の南側と北側は、現在水田地帯として利用されているが、かつては広い湿地帯で葦の密生した湿原であつた。したがつて、湿地帯に突出した坪状の丘陵であつたことが判明した。

2 調査経過

三ツ木丘陵の先端部から200m×100mの範囲を表面調査した結果、先端部に近い丘陵稜線から南側斜面にかけて、土器（縄文式、弥生式、土師式、須恵器）破片が密集している箇所が認められたので、この地点に試掘溝を設定した。（実測図参照）

〔番号〕	〔長さ〕	〔巾〕	〔位置〕	〔方向〕
Tr A	80m	2m	丘陵の中軸に並行	北東～南西
Tr B	50m	2m	" 直角	北西～南東
Tr C	25m	2m	Tr Bの対称	北西～南東

この十次試掘溝を基準として、各部分の所見にもとづいて十次の交点を基点として放射状に試掘溝を延長した。クロス点附近に包含状態に異状を濃密さを認めたからである。増設した試掘溝は次のとおりである。

〔番号〕	〔長さ〕	〔巾〕	〔方向〕	〔十地点基準〕
Tr D	12m	2m	南	
" E	23m	2m	東	
" F	20m	2m	北	
" G	25m	2m	南西	"
" H	40m	2m	中軸に平行	Tr Aの対称地点
" I	20m	2m		Tr Cから南西
" J	50m	2m		Tr A北東から分岐、南側斜面

これらの試掘溝と検出された遺構の所見にもとづいて発掘区を拡大した結果、把握された遺跡の状況は次の通りである。

(1) 縄文時代遺跡

Tr A、B、Dの交点を中心に500平方mの範囲およびTr Bの南部200平方mの範囲に検出された組石遺構および堅穴状遺構で作出した押型文土器片等によつて縄文時代早期(中葉)に属する遺跡であることを確認した。

(ア) 組石遺構および積石遺構

組石は、直径40cm~60cm、高さ1.5cm~2.0cmの鉢状に礫または平石を組み合せたもので、鉢の角度は80°~85°であつた。一見小形の石組伊に近い形状であるが、縁が斜角をもつ点、底部まで石を敷きつめてある点異なる。包含層位は軟質ローム層上部から、漸移層に一定のレベルで出土した。石質は主として硬砂岩、細流花崗岩等である。また傍らに焼けた硬砂岩礫積石遺構が伴つた。その礫の数は40箇~60箇ほどである。そして時に積石遺構の下に石組が存在する場合もあつた。また、Dトレンチにおいては、ローム層内に掘り込まれた直径50cm~1m、深さ50cmのピットを伴つていた。

この積石及び石組遺構はTr Bにおいては、南斜面50mの距離に12箇所に散在し、Tr Dにおいては6箇所が集中して検出された。

また、Tr Aにおいては、焼土がローム層中において同じく組石遺構及び積石遺構に伴うことが認められた。

いずれも、押型文(山形文、市松文、鞠円文、捺糸文、網目状文)土器を伴い、他の時期の土器片は全く伴っていない。

(イ) 堅穴状遺構

試掘溝の交点近くのローム層に掘り込まれた不垂長鞠円形堅穴第7址及び第8址である。第7址はTr A内で、長さ2.5m、深さ80cm内外で浅く舟底形に掘りくぼめられ、東部と外側東側に柱穴6箇が伴つていた。遺物は押型文土器片及び磨石等が床面内から検出された。

第8址は、第7址の北部5mの位置に出土した。長さ3.2mの長鞠円形で深さ20cm程度で、南寄りに5~6箇の柱穴址が認められた。中央部東壁寄りに石皿が出土し、押型文土器片が密集して出土した。

この堅穴状遺構は、家屋構造としては確然とした規模をもつていた痕跡とは認められないが、少なくとも生活の痕跡として認めてよいと思われる。

(2) 弥生時代遺跡

A、B、B区に検出された竪穴式住居跡二戸で、8号住居址並びに4号住居址である。

丘陵の南斜面に位置し、北西から西南方向にかけて中軸をもつ長方形竪穴(5m×4m)で、地表からの深さ50cmであり、ローム層を80cm掘り下げて構築されたものである。

4柱址が認められ、北西側の相並ぶ柱穴間に埋込が行われ床面に焼土が認められた。

土器は、弥生式後期末に天竜川沿岸に盛行した中島式土器に所属する。この住居跡は、相並びほとんど同一形式で両者の間隔は2mであり、同一時期に存在した竪穴住居跡と認められる。

(3) 古墳時代遺跡

土師式に属する竪穴住居跡第7号址、第5号址、第1号址及び第6号址である。

(7) 第7号住居址

A B B区の中央部に検出されたが弥生式竪穴住居跡第8号址並びに第4号址の間で西側の大部分が1号址に切られ、東側の1部のみが残存していた。ローム質粘土を張り床としており、土師器破片十数片を出土した。推定規模は1辺8.5m内外の方形を呈していたと認められる。

(4) 第5号住居址

Bトレンチ東部の南側に検出された竪穴住居址で東西方向に中軸を持つ4m×3mの長方形竪穴でローム層を15cm掘り上げて構築されており、中央部に4柱址があり、東側壁に石組、粘土張りの竈を設けていた。床面から土師式の土器、鉄製刀子が出土した。

(5) 第6号住居址

Bトレンチ最東部に方形竪穴の一角が出土し、土師器破片が出土したが積層の時期が与えられず壊滅した。恐らく前述第5号址と同時期の方形竪穴住居址と推定される。

(6) 第1号住居址

A B B区の前述弥生式住居址の北部に接している一辺9mの方形竪穴式住居である。ローム層を15cm掘り上げてあり、周囲の壁にそつて、径80cm内外の自然石を2m間隔で並列して配列してあつた。柱址は6柱穴で8箇所並列し更に南北の中軸線上に9箇の小柱穴が並んでおり、室のしきりを思わせた。東壁の大部分を第2号址に切りとられており、竈の跡は不明である。出土遺物は比較的少なく、土師器、須恵器片であつた。極めて大規模な住居であり

特別な構造をもっているので、今後の精しい検討を要する。

(4) 平安時代住居址 237c

第1号址の東壁を切つて接続して構築された竪穴址で南北に中軸をもつ長方形(4m×3m)のプランを持つ。

東壁中央部に竈(石積、粘土張)が設けられ、中央部分に4柱址が認められた。

出土遺物は、灰釉陶器、土師後期甕・埴・碗、等で平安時代初頭の時期の生活址と認められる。

(5) 鎌倉時代住居址

Hトレンチ中央部に検出されたがトレンチ調査以外に拡大する時間を得ず、方形竪穴の一角が確認できたに止まつた。規模不明であるが、ローム層を25cm内外掘りさげて構築され、隈に直径40cmのピットを伴い、鎌倉時代と思われる硬質素焼の甕口縁部を出土した。

二 所 見

今度の調査は、いわば学問的な必要からの調査ではなく、三ツ木遺跡が開田工事で消滅してしまうので、それを事前に調査して充分なる記録をとり、後世に保存するという趣旨のいわゆる事前調査、緊急調査として実施されたものであります。これらの調査は、それがどのような性質の遺跡であれ、できるだけ完全に調査するというのが目的であります。

たまたま三ツ木遺跡の場合は、二重三重の意味で事前調査をしてよかつたということが考えられます。

その一つは、だんだんに判つてきたとおり、ここが縄文早期の大きな遺跡であつて、その後数千年の無住の時代を経て、弥生時代に入つて再びここに居住するようになりました。しかし弥生時代でもあまり古い時代ではありません。

それから古墳時代に入り、土師器、すえ器などの遺物の出土がこれを物語りこの時代と連続して奈良、平安の時代までここが集落であつたことを証明しています。

ところが、奈良、平安時代をさかのぼつた古墳時代の遺跡は、伊那地方にも各所に大きなものがあり、調査が行なわれてきましたが、この縄文早期遺跡の調査というのは、そう簡単にはできません。というのは数が非常に少ないことで、これはこの時代の住民の数が少なく、また文化程度も低く、極めて小集団で日本各地に点在していたため、まだ村を形成するというようなところまでいかなかつたのだ、と従来は考えられてきました。ところが三ツ木遺跡のあるこ

の場所は、一般の早期遺跡と立地条件が異なるという点が考えられます。

この遺跡は、やはり天竜川のいわば河成段丘の上に位置してあるということであつて、これは上伊那から下伊那にかけて、高い山の上や岩の奥などにも遺跡がありますが、平地にくせつた段丘面にも集落をつくつた遺跡が点在するということを書いています、それらのものの調査は従来ほとんどできていないと思われ

ます。したがつて、ここは天竜川の川筋の他の地方であまり見られないような河成段丘上に早期の遺跡があり、しかも遺物の分量も普通の早期遺跡に比べてはるかに多いということは、居住の年月が長かつたか或いは住居者の数が多かつたかであり

ます。縄文早期の人々が、比較的高い山の稜線などに小さいキャンプ程度の遺跡を各地に残しているというようなことから、これら早期の人間は移動性をもつていました。したがつてある場所に定着してそこで長く住み、次の世代へ受け継がれていくといつたことが殆んどみられなかつたのです。

そういう点で、この遺跡の調査の色々な結果は、今後この早期の時代の人たちの生活、或いはその集落のあり方など、各種の問題を解いていく上に一つの有力な手がかりになるものと思われ

ます。河岸段丘上にあるこの遺跡が、地質学上その何丘目にあるか、そして、その古さというものも考えておかななくてはなりません。この丘陵の上の方には有機質の黒土層があり、その下は黒味がかつたいわゆる亜ローム層があり、これは非常にやわらかく、その中に早期時代の遺物、即ち土器や石器が含まれているわけであり

ます。それから下は、固い粘土質のローム層で、それが大体2~3mあり、その下はあまり厚くはないが白いガサガサした白土層があります。更にその下はまたローム層があるという一種の洪積台地ですから、この段丘の形成というものは非常に古いのです。

このことに関連して、この対岸になりますか或いはそれより上になりますか、例の御子柴の遺跡があり、段丘の高さから見ると、こことほぼ同じ位ではないかといふこともいわれています。

これは是非、地質学の人に明らかにしていただきたいと考えていますが、そういうことがこの早期の遺物を出す下のやわらかい亜ローム層の底や、或いは固いローム層の上の方にも縄文以前の石器を出す可能性があるわけです。緊急調査、事前調査の場合、そのために時間を費すことはできませんが、我々が今回採集した遺物の中に、2、3そうした問題を考えるにたつたような、黒曜石で作られた石器、或いは御子柴で発見されたような、非常に特徴のある磨製石器といつたも

のが出てくるということは、時代が一段さかのぼり得る可能性もあるわけです。

以上のようなことから、この遺跡の古さというものは、早期全般の研究上非常に有利であつたばかりでなく、新しい知見というものが広く掘られた範囲内で考えられます。それは、一つは大小の打ち割られた石をどういふ目的のためか一ヶ所に寄せ集め、点々としてそりいふものが各所にあることです。この物の意義、性質はいますぐに決定しかねると思います。というのは、早期の遺跡はここ程広く掘つたところはないのですから軽率に言えませんが、それをくずしてみると、その状態は必ずしも一律ではなくあるものはその下に意識的にはつきり石を組み合せたような遺構のあるものもあります。それは炉のようにみえるものもあるし、そうでないものもあつて、石積みはいつたいどういう意味をもっているのか、また他の遺跡にも発見できる可能性があるのかどうか、このことは今後に残された大へん重要な点であります。

段丘そのものは、先程地層の問題を述べましたが、あの石組みに使つているよりのな石、つまり礫層はないのでして、これはどうしてもそり速くない所から運んできたものと思われまゝ。そして、その石を打ち割つて積み積ねたものとみられるのです。それと同時に、その中にまじつてくぼみ石とか、或いは石の籠、または「殺すり石」と名づけられている菅平地方の押漕紋の遺跡から多く出ている長手の石でありまして、その尖つた先端は穀類をすりつぶしたと思われる跡がついています。

これらは、小果、或いはその裏側の下高井辺の菅平に近い地方の人たちは、この石を「殺すり石」と呼んでいます。同様のものが今回の石積みやその附近に散在していました。また、黒燧石の細片なども完全な石炭（ぞく）とともに発見されています。

このような石積の状態は、今までにどこでも調査されていません。積石を採取できるような川も近くにもつている遺跡であつても見当たらないわけでありまして、ここと同じような広さの遺跡を今後調査し、比較してみなければ何とも申せません。かういふところに、早期に関する問題点があるのです。

もう一つは当時の住居跡の問題ですが、これは早期の時代の住居跡というのは、2, 3の例を除いて「これが住居跡ぞ」といわれていまして、それは非常に不明瞭なものでありまして、そのゆえんについては三つばかりの大きな考え方や意見が出されています。一つは先程申しましたとおり、当時の住民は非常に移動性をもつており、たえず住居が移つていることと、小集団で歩いていまして、そんな固定的な穴を掘つてがっちりした柱を立て、その上に上屋をかけるというような長期居住のできる家ではなかつたということでありまして。

それからもう一つは、平地部でなく山手の方ですとその附近に洞窟がありまし

て、その洞窟を住居としていました。それらの山奥の洞窟をさらいますと、大抵早期の遺物が包含されています。

ですからこのような露天に家を建てるということとをせずに、自然の洞窟があれば、それを借用したのではなからうかということ、これが第2点であります。

第8の考え方としては当時の人間はたて穴住居を作らなかつた。つまりこの地面に柱を建てて小屋掛けしたのではないのですから、たて穴住居跡も見られず、また、火をたいたといつても、地表つまり黒土の上ですから、赤土までなかなかとらず、痕跡を残してありません。この三つを考える場合に、まだ未確定のところもありまして、いずれにしても早期の時代の発掘調査というものはまだまだ不十分であります。それに対して今度の三ツ木遺跡調査は徹底的にやりましたが、やはり当時のものでしたたて穴住居は発見できませんでした。

しかしながら、この広い範囲に大量のものをもっているから、しばらくの間定着して住んだのではないかということは想像できます。土器などというものは、そうたえず移動していたのでは大量のものは作れませんし、あのこわれやすいものを持って引越して歩くなどということはとやうてい考えられません。

そうすると、ある程度の小屋はつくつたのだと考えられます。殊に西北の風が相当強くあたるこの地帯で、秋から春さきにかけて非常に寒く、もちろん丘陵一帯は森林で覆われていて防風林の役目をしていたといつても、寒さはきびしいわけで、そうするとやはり平地といいますが、地表に小屋がけして住んだのではないかとも思われます。でも積極的にそうであるという証明できる材料もありません。

先に申しましたとおり、縄文早期の三ツ木遺跡に縄文人の住居があつたとすれば、それこそ重大な発見であります。これが住居跡だとはつきり断定できる資料はありませんでした。しかしこの遺跡に重つてずつと時代が下つた弥生時代のたて穴住居跡が二棟分出てあります。それから土師関係のたて穴が三棟分、合計五棟分のたて穴住居跡が発見されたわけです。そして、土師の住居三棟のうち一棟はおそらく奈良時代というよりむしろ平安時代の住居であつて、これら土師の時代のものは、それぞれ全部がカマドをもっていました。いままでに他の場所でも確認されており、三ツ木遺跡もその例外でないことが証明されたわけでありす。

その他個々に発見されたものについても色々問題がありましようが、これからのものはかつて充分整理しまして、住居の状況とそこから出土した遺物との有機的を関係というものを確かめた上でもう少し具体的にこの遺跡の構造というものを考え、その考えるまでの記録一切がきちんと整理されるということにならなくては行けないと思ひます。

現地での調査は終つたわけですが、これからの仕事が重要であり、またそれだけに苦労も多いと思います。

地元の皆さんのこの仕事に対する理解と、調査団各位の熱心な研究意欲が、現地での調査を達成したわけでありまして、その点大変りっぱな活躍事業であつたと思います。いままで申し上げてきたことは時間の関係もありまして、たいへん抽象論めいたところがありますが、以上のようなことをこの調査を通じて感じたわけでありまして。

三ツ木遺跡発掘作業日程

3月4日 土曜日 曇

午前 保坂係長・田中主事・荷物材料三ツ木会所運搬

午後 春日課長・保坂係長・伊藤主事・友野調査団員

現地踏査トレンチ設定について打合せ

八幡団長が来てから区域を決める事の方が良いと言ひ事になり、三ツ木会所に集積した材料点検

午後4時30分終了

八幡一郎団長・木下正史(東京教育大学大学院)

午後7時41分来伊 板屋旅館宿泊

3月5日 日曜日 雨

小林教育長・春日課長・保坂係長・午前8時30分出庁

雨のため発掘作業中止

富県公民館長に連絡中止を依頼する。

八幡団長と打合せ午後トレンチの区域設定をする事にし、林団長補佐・友野団員・御子柴団員・太田団員にその旨電話連絡する。

午前11時30分 板屋旅館にて打合せ会

出席者

八幡団長・林団長補佐・友野団員・御子柴団員・太田団員

小林教育長・春日課長・保坂係長

1. 友野団員を現場責任者とする。

2. 午後トレンチ区域の設定を行う。

午後1時40分ハイヤー2台で三ツ木へ

田畑館長立会

大トレンチ2本設定 午後4時20分終了

3月6日 月曜日 曇 発掘作業第1日

午前9時 調査委員会・調査団・事務局関係者

富県地区作業員・伊那北高校生・笑輪工高校教諭及び生徒

一同現地集合

献入れ式

小林教育長挨拶

献入れ 八幡団長

調査団員の紹介 春日課長

林団長補佐から作業上の指示

直ちに調査団員によるトレンチの杭打ち

A B C D F G 6本のトレンチ

A トレンチ L 7.5 m W 2 m H 50 cm

B " L 4.6 m W 2 m H 45 cm 灼跡3ヶ所発見

C " L 1.5 m W 2 m H 60 cm

D " L 1.2 m W 2 m H 45 cm

F " L 1.9 m W 2 m H 20 cm

G " L 2.2 m W 2 m H 50 cm

ふるさわ写真館による撮影

調査委員

小林教育長・有賀京一・田畑清美

調査団

八幡団長・林団長補佐・友野良一・御子柴泰正・根津清志

太田保補助員・木下正史(東京教育大)・林賢(岡谷市)・

柴登己夫(笑輪工高校)

社教委員

高木委員長・春日兼喜

公民館長

馬場昌三・辰野伝衛

事務局

春日課長・保坂係長・伊藤主事・田中主事

作業員 43名

(市職員8名・地元31名・高校生4名)

市職員

村山主事・坂田主事・松沢主事・白鳥主事・林主事・矢沢主事
酒井主事・山崎富士男

笑輪工高校生

向山良子・井上房子・野牧幸雄

伊那北高校生

野溝清一

地元

竹村さち子・田中くに系・竹村小春・坪木まさご・桜井治・田中たつ系
小牧えつ子・北原きよ子・広瀬三千代・吉沢寿人・吉沢みつ系
田畑年子・春日軍次郎・酒井すえ・吉沢政一・酒井りめ子・埋橋富子
鹿野たつみ・中原信子・春日正紀・藤沢喜重・下島司・下尾茂雄
下島一紀・伊藤茂樹・田畑鉄雄・小牧録二郎・伊東善三・北沢清治
鹿野栄

役職員 20人

作業員 (一般 39・高校4) 43人

計 63人

3月7日 火曜日 晴

午前9時作業開始

A B C D F G 各本発掘作業

専門的調査、記録並に撮影が本格的に実施される。

Aトレンチ L78.5m W2m H70cm

Eトレンチ L15.5m W2m H25cm

Gトレンチの拡幅作業

Fトレンチ掘下げ作業

午前10時30分鹿野組よりベルトコンベアー借用

午後よりFトレンチに使用 能率倍増

縄文早期土器より糸紋・穀粒紋・格子紋・菱型紋土器の破片多数発見

Eトレンチより住民跡発見

午後2時調査団会議

午後2時30分林補佐 上伊那地方事務所耕地課並福島区へ

午後3時 八幡団長帰京

信大鈴木教授来場

調査委員

有賀京一・織井静夫・正木一英・田畑清美

調査団

八幡団長・友野良一・御子柴泰正・林賢・木下正史

事務局

春日課長・保坂係長・田中主事・伊藤主事

作業員

市職員・村山主事・坂田主事・矢沢主事・酒井主事・筑輪工高校柴教諭

地元

伊藤喜三子・板山たけよ・田畑さと子・田畑年子・竹村小春・中原信子

広瀬三千代・小牧えつ子・中村きよ子・北原きよ子・垣橋とみ子

竹村さち子・吉沢みつ糸・鹿野たつ美・坪木まさご・下尾彦雄

北沢ふき子・北沢千代子・北沢フキ・牛山初・伊藤邦人・田中幸雄

下島司・小牧録二郎・下島国武・北原清治・中原長一・藤沢喜重

下尾茂雄・伊藤次雄・吉沢寿一・田中理一・登内豊彦

役職員 13人

作業員 38人(一般38(女18)・高校生0) 計51人

3月8日 水曜日 晴

午前7時作業開始

放射線型の7本のトレンチをそれぞれつなぎ合せ作業

E トレンチの横に矩形のトレンチ発掘

工務課 酒井主事・三沢主事により平板測量の地形図の作成作業
各7本の本発掘作業

午後3時20分 ほうげんの塚のオハライ

役職員・作業員全員集合・北沢神官によりオハライの行事を行う。

作業終了後宿舎板屋旅館にて調査団員 友野良一・御子柴泰正・根津清志
木下正史・春日課長・保坂保長打合せ会

本日までの遺跡発掘の状況に対する検討と、今後の調査の方法について打合せを行う。

1. 発掘日程が3月12日終了予定であるのでこれ以上新規のトレンチは行わず今迄発掘したものの仕上げに重点をおくこと。
2. ほうげんの塚は明3月9日に発掘作業を実施する。

以上2点について結論を出した。

調査委員

正木一美・田畑清美

調査団

友野良一・御子柴泰正・根津清志・木下正史

教委・文化財委

井上俊美・松沢新右衛門

事務局

春日課長・保坂保長・田中主事・伊藤主事・米山主事・松沢主事

矢沢主事・酒井主事・山崎富士男

市工務課 酒井主事・三沢主事

作業員

箕輪工高校柴敬諭・辰野町舟田智理

辰野高校

池上正・浦野治・白鳥信雄・篠田道雄・平等稲雄・赤羽大秀・相沢一広

池上隆文・井上博司・有賀均・清水保裕・伊藤正己・渋谷政男・原信昭

地元

吉沢賢子・中村いわよ・田中たつゑ・吉沢みつゑ・竹村さだゑ

竹村幸子・田中くにゑ・酒井うめ子・中原信子・北沢ふき・北沢千代子

館 長

山岸館長

事務局

春日課長・保坂係長・田中主事・名和主事・村山主事・坂田主事
白鳥主事・矢沢主事・酒井主事・山崎富士男・伊藤主事
市工務課 伊沢主事・酒井主事・三沢主事

作業員

箕輪工高校 柴教諭

辰野高校

唐沢修平・藤沢公明・片山純志郎・尾針優・鈴木雅夫・赤羽大秀
田中喜美男・松井悦子・宮下知世子・宮下美知子・平沢康・木下正二
篠田道夫・白鳥信雄・平等稲雄・池上正・神戸博・山田政雄
弥生ヶ丘高校

吉沢愛子・下島みのり

地 元

野溝清一・北沢清治・登内豊彦・下尾彦雄・伊藤肇・伊藤次雄
埋橋良和・柴登己夫・田中進・吉沢元徳・伊藤邦人・伊藤豊・下尾茂雄
北沢村治・下島司・下島国武・守谷肇一・板山始・中村謙・北沢瑠子
伊藤喜三子・田中くに系・坪木まさこ・鹿野たつみ・竹村さち子
中村くに子・橋爪きみ子・中村いわよ・中原信子・広瀬三千代・田中たつ丞
田畑年子・竹村小春・竹村さだ丞・吉沢みつ丞・北沢千代子・北沢ふく
北沢ふき子・小牧えつ子・北原きよ子・埋橋富子・中村清子・酒井梅子

役職員 15人

作業員 72人 (一般52人 内女24人

高校20人 内女5人) 計87人

3月10日 金曜日 晴曇後雨

午前9時作業開始

作業員 86人

A B E各トレンチ間をつなぎ作業並に仕上げ作業

Gトレンチ西側拡大発掘作業

B-E間 住民跡ノ発見

E " 2発見

E-A間 住民跡ノ発見

実測・記録・撮影を行う。

F M 1.00 調査委員会・調査団合同打合せ会

① 3月12日迄には発掘作業完了する。

② ほうげんの塚は石積のみ掘り起す。

諏訪市藤森先生・下諏訪町中村先生外2名視察
田畑館長地主3人に対する収益差について

調査委員

小林教育長・正木一美・田畑清美・向山雅重

調査団

八幡団長・友野良一・御子柴泰正・根津清志・林賢・木下正史・大田保
館長

辰野伝衛

事務局

春日課長・保坂保長・田中主事・坂田主事・松沢主事・矢沢主事・酒井
主事

市工務課 伊沢主事・酒井主事

高校

地元高校

吉沢国雄・小牧朝芳・有賀洋一・北沢克己・吉沢元徳

弥生ヶ丘高校

吉沢愛子・下島みゆき・田中えつ子・中村秀子

笑輪高校

中村雅成・竹村富雄・野牧幸雄

辰野高校

藤田久一・高倉正行・若林康文・渋谷明・鷲尾健一・尾針優・矢島真幸
井口善人・山岸勝・中谷秀雄・小林茂夫

駒ヶ根工業高校

竹松良行

天竜高校

中原長則

高遠高校

向山文雄・伊藤富治夫

赤穂高校

唐沢明男・小出文雄・下島賢児・飯島みつよ・宮崎のぶよ・宮下道子

今井史子・伊藤要・山本泰子・千村節子・宮沢多勢子・堀内芳明

橋場康二

箕輪町

柴登己夫

地 元

伊藤邦人・下尾茂雄・板山始・北沢清治・藤沢喜重・田畑邦男・伊藤豊

吉沢政一・登内豊彦・野溝清一・北沢村治・小牧録二郎・下島国武

中村謙・下島司・田中進・田中たつ夫・竹村さち子・田中くに系

吉沢みつ夫・酒井梅子・竹村さだ夫・竹村小春・田畑年子・鹿野たつみ

橋爪きみ江・北沢千代子・北沢ふき子・北沢ふき・中村きよ子

埋橋とみ子・小牧えつ子・池田かおる・中村いわよ・広瀬三千代

中原信子・埋橋久子・北原きよ子・小牧京子・下尾彦雄

役職員 15人

市工務課 2人

作業員 一般 44人(女23人)

高校 40人(女12人)

計 101人

3月11日 土曜日 晴

各トレンチ清掃作業

各住民跡清掃

実測・記録・撮影

調査委員

小林教育長・田畑館長・正木一美

調査団

八幡団長・林補佐・友野良一・御子榮泰正・根津清志・林賢・太田保
木下正史

事務局

春日課長・保坂係長・田中主事・伊藤主事・矢沢主事

弥生ヶ丘高校

吉沢愛子・田中えつ子・下島みゆき

地元高校

小牧朝芳・田畑進・中原長則・田中由美

赤穂高校

加納てる子・有賀すみ系・北沢克己・下平秀美

胸ヶ根工業

竹松良行

地 元

吉沢みつ系・田中くに系・田中たつ系・堀橋とみ子・竹村さち子
中村いわよ・北原きよ子・小牧えつ子・橋爪きみ子・竹村小春
鹿野たつみ・坪木まさご・竹村さだ子・中村くに子・伊藤すえ子
田畑由子・田中年子・田畑年子・中村謙・榎井治・下島国武・吉沢元徳
下尾茂雄・板山肇・下島司・御子榮広・伊藤邦人・野溝清一・伊藤豊
中村秀子

役職員 13人

作業員 32人(一般 30人(女19人)

(高校 12人(女 4人) 計 45人

3月12日 日曜日 曇

午前9時作業開始

各トレンチ清掃作業

各住民跡測量・記録・写真撮影

住民跡 ツボ3ヶ発掘

H・I トレンチ2本入れて見たが目新しいものはない。

A・H・I各トレンチ整理作業

午後4時30分作業終了

閉団式

午後5時15分 木下正史さん帰京

調査委員

小林教育長・田畑清美

調査団

林団長補佐・友野良一・獅子柴泰正・根津清志・木下正史

事務局

春日課長・保坂係長・田中主事・伊藤主事

作業員 47名(市職員2名・地元38名・高校生7名)

市職員

矢沢主事・山崎富士男

弥生ヶ丘高校

田中えつ子・吉沢愛子・中村秀子

辰野高校

渋谷明・吉沢政一

箕輪高校

井上房子・向山良子

地 元

熊谷進・根津要介・平沢博・伊藤すえ子・田中たつ夫・中村いわよ

田畑よし子・中村くに子・下島さだ子・酒井梅子・小牧えつ子

吉沢みつ夫・橋爪さみ夫・中原歌子・吉沢千代子・竹村小春・竹村さだ子

田畑年子・坪木まさご・鹿野たつみ・野溝清一・板山肇・下尾茂雄

北沢清治・伊藤勲・中村謙・下島司・伊藤豊・春日隆美・吉沢元徳

伊藤邦人・田畑良治・北沢克己・登内豊彦・竹村豊人・中原信子

北沢六馬・春日正策

3月13日 月曜日 晴

各住居跡・炉跡に石灰撒布覆土作業を行う。

作業に使用した器材・器具・机・椅子・天幕等を撤収する。

出土した遺物の整理 魚箱28ヶを市の車で市民会館に運搬収納する。

ベルトコンベアー・ショベル・ヤグラの材料

三ツ木会所・一輪車・その他地元より借用した物を謝礼とともに返納する。

未発掘地について田畑館長さんが地主中村芳美さんに交渉する。(総面積
3反ノセ8歩の内水田面積2反6セ・畑地面積5セ8歩の子定を畑地を1反
歩増やして将来それを発掘させて頂く様交渉する。)

調査委員

田畑清美

事務局

保坂係長・田中主事

作業員

市職 矢沢主事・山崎富士男

地元 吉沢政一・伊藤豊・吉沢元徳・北沢清一・竹村小春・登内豊彦

田畑年子・板山富子・田畑由子・野瀬清一・橋爪きみ系・

伊藤すえ子・竹村さだ系・吉沢みつ系・中村謙・吉沢愛子

中村秀子・田中えつ子・中村くに子・中村いわよ



















